

モノラル録音でも再発盤ならステレオカートリッジが好都合

ただしひとつだけ条件があります。それは目安として 1968 年以降に制作された再発盤であることです。

この意味ですが、モノラルレコードの原盤のカッティングがモノラルカッターヘッドではなくステレオカッターヘッドで行われたであろうからということです。

ステレオカッターヘッドでモノラルの溝を切る場合、左右のチャンネルに厳密に同じモノラルの信号を送り込まないとステレオカッターヘッドはモノラルカッターヘッドのように左右に動いてくれません。少しでも左右の音の位相ずれなどがあればステレオカッターヘッドには上下の動きが出てしまいます。

果たしてステレオカッターヘッドにどの周波数帯でもピタリと位相が揃った同相信号を送り込むことが出来るのだろうか？というと、どうもアヤシイ。

それでは具体的に左右のモノラル信号に微妙な違いがあるモノラル盤（実はステレオ盤？）をモノラルカートリッジで再生するとどうなるか？ですが、少し鮮度感が不足したおとなしい再生音になります。

普通はモノラル録音盤にはモノラルカートリッジを使用すべき、ということなのですが、ステレオカッターヘッドで制作されたモノラル盤についてはステレオカートリッジで再生して構わない、というよりむしろその方が好結果を期待出来ます。

わざわざモノラルカートリッジを準備する必要はありません。

それではモノラルカートリッジで再生した方が好いモノラル盤とは一体どういうものか？それはモノラルカッターヘッドで溝が切られたモノラル盤、いわゆる“オリジナル盤”ということになります。

ただし、ここで言うモノラルカートリッジとは、ステレオカートリッジと同じ針先半径（大体 0.65 ミル=16.5  $\mu$  m）を持つものではなく、例えば Ortofon SPU Mono MK II のようにモノラル時代と同じ 1 ミル=25  $\mu$  m の針先半径を持つものです。

という次第です。

オリジナル盤の収集家でもない限り、普通にアナログレコードを聴かれる場合は、例えば DENON の DL-103 が一丁あれば全て OK ということになります。つくづく DL-103 はいわば万能選手のようなものだと感心します。

以上